

公共工事設計労務単価改善下の建設労働者の賃金実態(Ⅱ)

——釧路における現場調査より

川村 雅則・野村 雅也

はじめに——建設労働市場の縮小と、労働実態の把握の必要性

北海道センターでは、今期の取り組みとして、北海道における建設産業と労働者（とりわけ北海道という積雪寒冷地に特有の季節雇用で働く人たち）の実態を把握し、『白書』（仮称）というかたちでとりまとめることを予定している。

アベノミクスによる公共投資増・建設政策の転換で、例えば公共工事設計労務単価が引き上げられたものの、では、果たして建設労働者の状態は改善されたのか。公契約運動の基礎作業としてもその把握が求められていることは繰り返し述べてきたとおりである。

とくに北海道では、長期におよぶ公共工事削減・建設不況の下で建設労働市場が縮小し続けてきた。図表1のとおり、建設就業者数（白棒）の縮小規模は大きく、就業者全体に占めるその割合（折れ線）も10%を割った。

また、かつてピーク（1980年度）で30万人を数え、そのうち建設だけで20万に及んだ季節労働者数（黒棒）も、2014年度には、全体で7万人余、建設は4万人にまで減少している（図表には示していないが、季節労働者全体に占める建設就業者の割合も同期間に68.7%から54.3%にまで減少）。

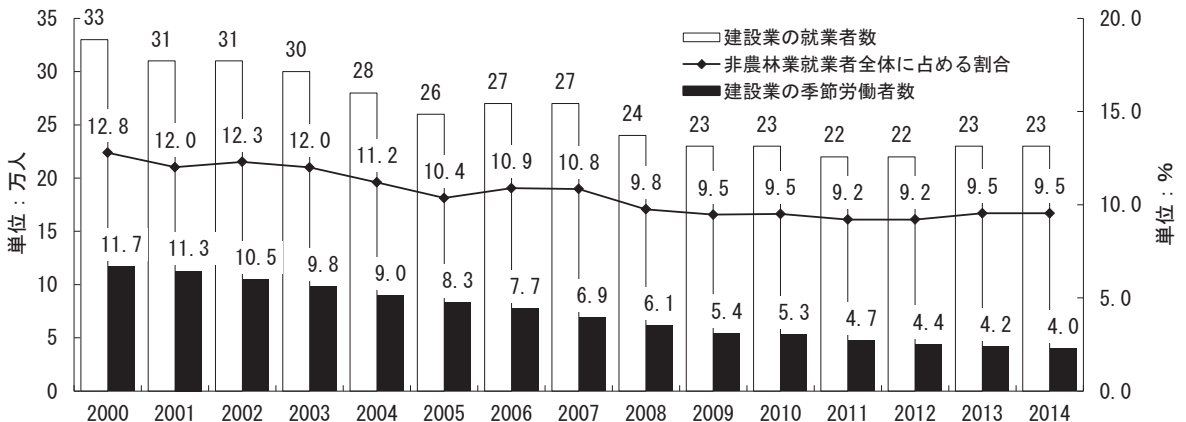
冬期技能講習制度の廃止（2006年度）や高齢化にともなう労働市場からの排除が季節労働者の実態把握を困難にした。それでもセンターでは、大規模な調査を繰り返し行ってきた。

しかしながらそれも、北海道からの委託調査研究（2010年度）を最後に途絶えてしまった。今あらためてその作業を再開したいと考え、今期の方針に掲げた次第である。

早速、建設現場調査のレポートが釧路から寄せられたので、前号の旭川に続き、紹介する。

（釧路の状況については、本誌156号「労務単価引き上げで賃金は改善されているのか」も参照。）

図表1 北海道の建設業における就業者数、その割合及び季節労働者数の推移



注1：就業者数は年平均、季節労働者数は年度の値。

注2：2000年は北海道の労働力人口が289万人とピークを迎えた年。

出所：就業者数は、総務省『労働力調査』各年版より、季節労働者数は、北海道労働局『季節労働者の推移と現況』各年度版より作成。



現場調査のようす

季節雇用が3人である。通年雇用でも賃金支給形態は日給制であることをまずおさえておきたい。第二に、賃金の増減は、「上がった」は4人とどまり（しかも

その金額は平均475円）、「変わらない」が13人、無回答が6人という状況である。

第三に、社会保険こそ「厚生年金」が18人で最多だが、第四に、肝心の賃金水準は、どの職種においても、設計労務単価にはるかおよばない。

アンケートに寄せられた、「賃金が安く職人の給料が上がらない→職人がいなくなる」（46歳、鉄筋工）、「休みがもっと欲しいです!!」（19歳、鉄筋工）といった声や、「通年雇用だが日給月給のために冬場に仕事が少ないと生活が安定しない」「いつまた季節に戻るか不安」（聞き取り）といった声が切実だ。

まとめに代えて

季節労働者の通年雇用化や雇用促進を目的に、自治体や業界労使などで構成された「釧路地域通年雇用促進支援協議会」という組織が設けられている。建交労釧路支部はオブザーバーとしてそこに参加している。

会議では、例えば予定価格が低いことに対する不満が出されたり（業界側）、設計労務単価の引き上げが賃上げにつながっているかどうかの問いが寄せられる（自治体側）など、私たちの問題意識と重なるやりとりも聞かれる。これは私たちの運動を勇気づけるものである。

現場のより一層の把握と同時に、関係者に対する要請などを強めていきたい。

（かわむら まさのり 北海学園大学教授）

（のむら まさや 建交労釧路支部副委員長）

釧路現場調査からみえる建設労働者の現状

現場の労働実態が見えなくなってきたことから、釧路でも、2012年から工事現場調査を再開した。調査の復活はじつに10余年ぶりである。以後、毎年数カ所の現場に入っている。調査の内容やノウハウなどは旭川と同様である。

2015年には、1月と3月に、2カ所（土木＝舗装改修工事、建築＝市営住宅耐震改修工事）で調査を行い、現場所長からの聞き取りと、労働者へのアンケート調査を実施した。

聞き取りでは、どちらの現場でも、下請の労働力の確保に苦慮していることが強調された。ただその一方で、下請に対して元請として賃金改善等の便宜を図っていることなどは語られなかった。そもそも元請として、下請の賃金の把握さえ十分に行われてはいないようだった。

さて、アンケートでは、27人から回答が寄せられた。そのうち、日給制の23人（全員が男性で、年齢は19～67歳）の結果を以下に紹介する。

第一に彼らの雇用形態は、通年雇用が20人、

図表2 公共工事設計単価と比較した日給者23人の賃金等

	人数	平均年齢 年 歳	平均経験年数 年 年	平均賃金 (日給) 円	設計労務 単価 円	割合 %
舗装工	6	46	23	10,433	13,500	77.3
鉄筋工	5	46	23	9,500	17,400	54.6
とび・土工	3	64	34	8,500	13,500	63.0
型枠工	4	45	23	8,850	16,800	52.7
はつり・アンカー工	5	38	19	8,440	18,200	46.4

注1：設計労務単価は2014年度の値。

注2：舗装工は「普通作業員」、はつり・アンカー工は「はつり工」に置き換えて比較。

注3：鉄筋工は、夏・冬の一時金を含めると平均賃金は10500円（労務単価比60.3%）となる。